ある夏の日の……

マホ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある夏の日の……

【Ｎコード】
Ｎ２２８２Ｎ

【作者名】
マホ

【あらすじ】

祖母の住む田舎で出会ったのは、古びた祠に封印されていた短刀……自称『妖』のイケメン、鳴戸。
なぜかそいつに気に入られた私は……

・展開がベタです。
・季節によって、短編として続きを更新していきますね。

楽しんでいただけると光栄です。

（前書き）

ベタな展開にご注意ください。

楽しんでいただけると光栄です。

それでは、どうぞ！

季節は夏……

空には、ジリジリと照りつける太陽と、真っ青な空に大きな入道雲、耳には残り7日の命を一生懸命燃やして鳴く蝉たちの声とどこからか響く風鈴の音が届く。

そう、まさに夏真っ盛りという……そんな日に私達は出会った。

その時私は、夏休みで家族とともにお盆休みの帰郷をしていた。

祖母の家は、四国の山々に囲まれた小さな村にある。
海も、割と近くそこから吹き込む風は、村を吹き抜けていくためとても過ごしやすい。

その日、私は祖母の家の裏山を一人で登っていた。
山自体はそこまで大きくはないむしろ小さいが、祖父の切り開いた道を登るしか道はないのでとても登りにくい。

しかも、短パンにサンダルという登山には相応しくない格好だ。

頂上につく頃にはへとへとになっていた。
頂上からの景色は、青い海と青い空、建物は一番高いもので学校という眺めが広がっていた。

「なーんにも変わってないわ」

そう、何も変わらない。
都会の喧騒の中育った私にはそれが不思議でならない。
でも、それがここの良いところだと思う。

景色も確認した事だし目的はこれだけ、というわけで降り始めようと振り向きざまに私は見つけてしまったのだ。
小さな抜け道のような木々の隙間を……

まるで本能に導かれるようにその道へと歩みよった私は、木々の向こう側に小さな祠を見つけた。
小さな、古びた祠を。
「今まで気が付かなかった……」

去年こんなものあった？
そんな事を思う間にも私の足は止まらない。
頭の片隅で、警報が鳴っている。
止めようと思っても、足が止まらない！？

引き寄せられるまま、祠の前に立った私は扉に手をかけた。

――――――ギィィィ…

軋んだ音を立てて開いた扉の奥には、お札の貼られた短刀が置かれていた。

私の手が引き寄せられるように、お札に伸びていく。

こ、これはダメでしょっ？
非現実的なものは信じてないけど……本能がこれはダメだと告げてるよ！！

だけど私の手は止まらない。
そしてついに指がお札に触れた。

静電気のような刺激を指先に感じると、そのまま一気にお札を引き剥がした。

……何も起こらない？
そうよね、何を心配してたのかな私。
早く戻らなきゃ……

祠に背を向けた時、
――――――チュドーンッ！！
背後から何かが粉砕する音が聞こえてきた。

ギシギシと首を後ろに回すと、土煙とともに咳き込む音が聞こえてきた。

「だ、れ？」

「ゲッホ、ゲッホ……あぁ……ちゃんと祠から出してからお札はがしてよ」

聞こえてきたのは男の声。
煙が晴れてくると、そいつの姿が見えてきた。

は、羽織袴（はおりばかま）？
あつっ！
見てるだけで暑いっ！！
顔は……カッコいいかも。

……はっ！
なに考えてんの私！
そいつは一度伸びをすると、
「ま、とりあえず出してくれてセンキュー」
ウインクした。
「ど、どういたしまして」
「俺の名前は鳴戸（なりと）お前だれ？」
お前誰って失礼な……
「……海音」
「海音か！　どんくらい閉じ込められてたかなぁ……家康が幕府作って何年？」
関わらない方がいい。
これ以上関わると何故か後には戻れないような、雰囲気を醸し出してるよこの人……うん、何もなかった。
帰ろ。
無言で背中を向けて歩き出した私に、
「えぇっ置いてくの？」
聞こえない。

私は何も聞こえないっ。

「あ！　ついて来いって事？　やっさしー☆」

聞こえない……って、え？

ついて来いって事？

後ろを見ると、ニコニコしながらついてきた。

……こいつはなんでこんなにも嬉しそうなんだ？

「どこまでついてくるの？」

「どこまでも」

ふわりと微笑む顔に鼓動が早くなった事は、気のせいだと思いたい。

だって顔だけはいいんだもんっ！

「そんな事出来るわけないじゃない！　そもそも、うちには泊めれない……っていうか、男連れ帰ったって大騒ぎになるわよ」

これで諦めてくれるでしょ……？

「あぁ……それは大変だね。でもそれなら、大丈夫だよ？」

「大丈夫って？」

「後でわかるさ」

想定外。

しょうがない……

帰ろ。

また山道（もはや獣道？）を降りるのか。

疲れるわぁ……

「ここ降りるの？」

「うん」

「疲れない？」

「疲れる」

「なら、俺がしたまで連れていってあげようか？」

「だ、大丈夫よ……って、え？」

拒否しようと思って振り返った私が見たものは、１５センチくらい浮いたあいつだった。

非現実的な事起きたーっ！

「掴まって？」

両手を出したあいつに、私の手は不可抗力によってまたあいつの手へと導かれて行った。

「よし、行くよ？」

私の手をキュッと握ったあいつは、さらに浮き上がって……

「ってな、なんで浮いたの？　私、重いでしょ？　下ろしてくれていいよ」

「重くないし、今おろしたら死んじゃうよ？　なんでって言われても……俺が妖だから？」

……どうやら私は夢を見てるようだ。
うん。
違いない。
これは夢だ。

だったら、聞きたいこと聞いとこっと。

「あんたって、さっきの短刀？」

「に、封印されてたの」

「へぇー……なんでお札なんか貼られてたの？」

「ん？　ナイショ」

「わかった」

聞きたい事はこのくらいか？
なんかもっとたくさんある気がする。

そのまま山のふもとまで降りてくると、こいつは私を地面に下ろして、私の前に舞い降りた。

「さ、海音のお家に行こ？」

「はいはい」

私達は、そのまま家の前まで歩いた。
でもこのままでは家に入れない。

「で、どうするの？」

「ふふっ……ちょっと待ってね？」

こいつが、指を組み合わせて何かを呟くと……

そこには、短刀があった。

「うわ……オカルトな」

こんな物をここに置いとく訳にはいかず、拾いあげると何故かあいつが嬉しそうに笑ったような気がした。

さて、それからそれを家の中に（私の部屋に）連れてくると、布団の上に置いた。

そして、そのままリビングに向かって家族の手伝いをしている間にそいつの存在を忘れてしまっていた。

その夜、私は短刀を布団に置いた事を忘れて寝てしまったのだ。

翌朝、目が覚めた私が一番最初に見たものは隣で眠るあいつの顔だった……。

この距離はないわ。

何度も言った気がするけど顔だけはいいんだもん。

だから心臓に悪い。

本気で悲鳴をあげかけたところでそいつはちょうど目が覚めたようで、私の顔を見ると瞬時に次に何が起きるか理解したらしい。

私の口をふさいで、もう一方の手を自分に持って行くと人差し指を唇にあてて、

「海音、叫んだらダメ。　ね？」

微笑んだ。

私が頷くと、嬉しそうに笑って手を離してくれた。

「……夢じゃなかったのね」

「夢だと思っていたの？」

「……ゴメン」

「いいよ、今日海音はどこに行くの？」

「……お祭り行こうかなって」

「お祭りかぁ……楽しみだね！」

うん。

楽しみだ。

ん？　楽しみだね？

「ついて来るの？」

「もっちろん！」

あー笑ってるね。

すんごく嬉しそうに……

断れないっ！

はぁ、それなら着替えさせないとね。

真夏のお祭りに羽織袴はないわ。

「その着物脱げる？」

「海音ったらこの態勢でそういう事言う？」

……体勢？

あ、添い寝のままじゃん私。

ってか、なんで隣で寝てるのよ。

短刀のままでいろよ。

「……変態」

「失礼な！　でも、脱げるよ？　海音が脱がしてくれるなら☆」

「黙れ変態……浴衣貸してあげるから、着替えてね？　そしたら、お祭り連れていってあげる」

「やった！　なら自分で着替えるっ」

「最初から自分でやりなさい」

「はーい！　二度寝しよっと。海音一緒に寝よー」

「私は起きるから。朝御飯は？」

「あるなら食べるぅ」

「……食べれるんだ」

「うん、食物から精気までなんでもこーいだよ？　もちろん海音も食べてあげるぅ」

「けっこうです」

「やーん海音が冷たいぃ」

あ、起きたはいいけどこいつがいたら着替えれないじゃん。

「ちょっと着替えたいんですけど？」

「どーぞー」

「出てけバカ！」

「けちぃ」

あいつはまた短刀になると、布団の中に入った。

着替え終わって、短刀を布団の下から取り出すと朝御飯をとりに一旦部屋を出た。

自分とあいつの分の朝食を持って部屋に戻ると、あいつはあのまま寝てしまったらしい。

４００年以上寝てたくせによく寝るなぁ。

起こすのも可哀想なので、そのままにして朝食を食べる事にしよう。

で、夕方までは暇な訳だ。

どうしようか……

あいつの分の浴衣をこっそり拝借しようとするか。

着付けは……自分でやれるな。

浴衣を持って戻ると、あいつは朝食を食べていた。
「あ、おかえりー！　ご飯ありがとう」
「ただいま。浴衣持って来たよ？」
「わーい！　その色好きー」
「そう、気に入ったようで良かったわ」
「着せてー」
「はいはい」
……えっ？
ここで脱ぐのかお前は。
「ちょっとストップ！」
「ん？　なに？」
「短パン貸すからそれはいて」
「あぁ……了解」
「ちょっと待っててよ？」
大急ぎで、お父さんの短パンを取ってきて渡すと、

「変わってるねー」

「これが普通だから……はけたら呼んで」

「はーい」

廊下に出て待っていると、

「海音ー！　お母さん達は先に行くからねー？」

「はーい！」

玄関のほうからお母さんの大声が聞こえてきた。

「海音？　着たけど」

「あ、うん」

扉をあけると、短パンに上半身裸という出で立ちで立っていた。

目のやり場に困る……

「着せてあげるから、言う通りにしてね？」

「はーい」

それから、こいつを着付けた私は自分が浴衣を着るために今度は外に出てもらい、浴衣を着た。

「着れたから、入ってきていいよ？」

「わぉ！　海音、浴衣似合うね！　かわいいよ」

「あ、ありがと」

お前も相当かっこいいなんて思ったけど、絶対口に出したりしない。

「髪結わないの？」

髪、かぁ……そうだな結いたいけど時間ないし。

「時間かかるからいいよ」

「俺がやってあげようか？」

「できるの？」

「まかしとけ！」

あいつは、私の後ろに立つと、かんざしとピンを使って手際よくまとめ始めた。

「でーきた」

「はやっ！　……上手だね」

「手先は器用だからねー」

ニコニコと笑うあいつに、浴衣も自分で着れたのでは……とか思いつつも、聞いて返ってくる答えはわかりきっているのであえて聞かない。

そろそろいい時間かな。

「なら、行こうか？」

「うん！」

お祭りをしている神社には、思った以上に人がいた。

「人が多いわね」

「お祭りなんて何年ぶりだろー？」

「４００年以上は、前だろうね」

「ありゃ？　そんなにたつのかぁ……」

ところでこいつは何歳なんだ？

４００年ってあり得ないでしょ？

……妖なんだっけ？

「ねー金魚救おうよ！」

「金魚すくいは、救うんじゃないから……むしろ追い詰めてるよね」

「あれ？　そうなの？」

「うん」

「ま、いいや。行こっ？」

「はいはい」

私達は、一通り回ると神社の奥人気のない静かな場所で休む事にした。

「つ、疲れた……」

「海音は人間だからねーしょうがないよ」

「基準が変」

「にゃははー」

相当歩き回ったにも関わらず、疲れた様子の全くないこいつはやっ

ぱり人外なんだろうな。
……いや、私の体力の問題か。

「そういえば、明日私達は帰るけどお前はどうするの？」

「ついてく」

「……やっぱり？」

「もちろん！　俺、海音気に入ったし」

勝手に気に入ってもらっても困る……でも、少し嬉しいのは何でだろ？

「……しょうがないなぁ」

「えっ？　いいの？」

「何で？」

「海音ダメって言うと思った」

う、言いたかったさ。
でも、何か言えなかったから……

「もしかして、海音俺に惚れちゃった？」

「なっそ、そんな訳ないでしょ！」

「ふふっそお？」

「バカ鳴戸」

「およ？　初めて名前呼んでくれたね」

うげ……

何かをやってしまった気がする。

「き、気のせいよ」

「海音かーわいっ」

「……うるさい」

私の顔が、赤くなってない事を祈ろう……。

――――――ガサガサッ……

近くの茂みから物音がしたかと思ったら、

「おうおう、てめえらイチャイチャしやがってうっとおしいなぁ」

いかにもバカ丸出しのチャラ男が出てきた。

しかも、何か変な誤解をしながら絡んできやがる。

「海音ーこの人海音のお友達？」

「は？　んなわけないでしょ。私にはこんなバカ丸出しの友達持ってないわ。そもそも、関わろうとも思わないし……バカがうつる」

「そーだよねー。海音は友達選びそうだし」

「て、てめえら！　人の事をバカにしやがって」

話しかけるなっていうアピールだったんだけど。

「え？　バカにバカって言って何が悪いの？」

「1＋2×0は？」

「3だろ！」

「1です」

「やっぱりバカじゃん」

「バカじゃん」

「うるせぇ！　もう我慢ならねぇ！」

始終叫んでいたバカは、最後にそれだけを言うと私に殴りかかってきた。

構えようとした瞬間、鳴戸に手を引かれた。
そのまま私をかばうように引き寄せられ、

「女の子に手をあげるなんて許せないねぇ」

声の雰囲気が変わった。

「なっ何でお前光って……」

表情はわからないけど、どうやらものすごく怒っているようだ。

「ん？　あぁ……妖力漏れちゃってるんだね。大丈夫、痛みも感じないうちに逝かせてあげる。海音、少し離れてて？」

有無を言わせない口調に下がらざるをえない。
離れて見ると、確かに鳴戸は光っていた。

ユラユラと揺らめくようにオレンジの光をまとう鳴戸は怪しく美しく、いつまでも見ていたいような雰囲気をまとっていた。

「江戸一番の妖術使いをなめるなよ？」

「ひっ……！？」

バカは今頃自分の置かれた状況を理解したらしい。

鳴戸は、一体何をするんだろ？
楽しみだ。

「いくよ？」

重心を下げて構えた鳴戸は、一瞬で懐に入ると鳩尾にいれた。

「っ！」

バカは崩れ落ち、振り向いた鳴戸は、あつもの鳴戸だった。

「つまんない」

「あらら？　ごめんねぇ人間に向かって妖術使うと、祠に逆戻りなんだー」

「だからお札貼られたの？」

「そ、陰陽師ってやつ？」

「へー……帰ろっか？」

「うん」

いつもの笑顔の鳴戸は、やっぱりカッコいいなんて思った私はいつか感じた戻れないという直感が正しかったと思ったのであった。

次の日、

朝イチでまた鳴戸のドアップを見させられた私は、鳴戸を布団から

出し……たかったけど、それは失敗に終わり……鳴戸の二度寝に付き合わされた。

それから、

短刀になった鳴戸をちゃんと持って帰ってあげたのは言うまでもないと思う。

ちなみに、家に帰ってからは相変わらず私の部屋に住み込み……夏休み明け、学校に転校（年齢詐称してるよね？）してきた時はまじめに驚いた。

家でお留守番がどうしても嫌だったらしい。

どうやって入ったかって？

そこは妖術を駆使したらしいよ？（本人談）

そんな訳で、私の非現実的な日常が始まったのでした。

（後書き）

季節ネタをやりたい時に、これの続きを更新したいと思います。

人気があるようなら、普段の海音＋鳴戸の様子（？）も書きたいと思います。

ご意見、ご感想、誤字脱字などありましたらお知らせください。

それでは、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2282n/

ある夏の日の……

2011年1月26日04時38分発行